

8月の“暑さ”に比べると沖縄の7月のそれは、“いたい”とでも表現したいほどの“熱さ”です。日射しは皮膚を突き刺す勢いを持ち、クマゼミのけたたましい合唱とともに通勤のわずかな時間でも体力を奪われます。新医師会館に棟上げされたドーム型の屋根は、強い日射し、台風、潮風、厳しい自然の与える試練をしなやかにいなす曲線であってくれと願うものです。

さて、力をためはじめた初夏の太陽が、表紙で築城400年の熊本城に降りそそいでいます。写真をとられた会長の宮城先生、常任理事の真栄田先生からは彼の地で行われた定例の九州医師会連合会の報告を寄せて頂きました。

生涯教育コーナーでは、琉球大学の高須信行先生からは5月のバセドウ病に続いて、甲状腺機能低下症の橋本病についてご寄稿頂きました。長年の研究から診療へのフィードバックされるボリューム豊かな内容は、前稿とあわせると、甲状腺機能性疾患の広範な知見を会員にもたらししてくれるものと思います。またもう一稿、那覇市立病院の山里将仁先生からは漏斗胸に対する治療の変遷についてNuss手術とその成績を中心に手解きして頂きました。きちんとした週術期管理で年長児、成人にも適応可能な手術法とのことで今後の発展で漏斗胸患者のますますの福音となりそうです。また、プライマリ・ケアコーナーでは、日常診療で遭遇する事の多い肩関節周囲の疾患について豊見城中央病院福嶺和明先生にご指南頂きました。明快な検査の指標、初期治療、専門医受診のタイミングについて示して頂きました。

インタビューコーナーでは、琉球大学医学部長に就任された佐藤良也先生にお伺いしました。琉球大学医学部創設期から30年近くにわたり研究・教育にご尽力されてきた先生からは、離島県ならではの医師育成の方向性の問題点、新臨床研修医制度開始後の大学病院での人材確保についての問題、医師会と大学との関わりについてご発言頂きました。

離島県の抱える問題の別の一面として、血液供給とその離島搬送に関わる実績について、「愛の血液助け合い運動」月間にちなんで、沖縄県立赤十字血液センターの屋良勲先生からお知らせを頂いております。その中で、県内で血液供給量が漸増しているということ、血液センターを中心とした関係者の方々のご尽力の賜物と感謝いたします。

感染症にまつわる話題が3題。安里哲好先生から県福祉保健部との連絡会議からは旅行者からの麻疹発生時の絞り込みと緊急ワクチン接種により蔓延を防御しえた実例とともに、県内で流行が懸念される日本脳炎ワクチン確保にかかわる問題点の報告がなされました。さらに金城忠雄先生からの新型インフルエンザのパンデミック対策行動計画の策定に関する報告は、行政と医療現場の綿密な連結の必要性と平時におけるシュミレーションの重要性を示す内容でした。またこのような感染症対策・治療の法的整備としてその一部改正の骨子について稲福恭雄県衛生環境研究所長からご説明いただきました。

発言席では、かじまやークリニック 山里将進先生からご自身が携わる在宅医療の中での問題点を多々指摘して頂きました。在宅介護サービス整備の遅れは制度の不整備がその根源にある実情についても報告して頂きました。今後の在宅医療・在宅介護への移行をはかる上での矛盾点、問題点は山積しており、その早急な解決が求められます。

そんな中、後期高齢者医療制度とともに様々な問題をはらみながらも走り出した特定健診・特定保健指導制度についてですが、そのFAQについての記事が、少しでも現場の混乱の解消になる事を祈念します。

しみず内科胃腸科21 清水健先生のロゴマークに込められた21の数字は、診療時間が示したものとありますが、走り始めた21世紀をとあいまってキュートな印象をうけるものでした。

今月号でも珠玉の随筆が4編寄せられました。会員の諸先輩の皆様の懐の深さに恐れ入るばかりで人になげかけられるもののない己の哀れを感じます。

さて、嶺井リハビリ病院 久手堅憲史先生の魔女の一刺しにはじまる痛みと付き合いですが、その中での希望と落胆、癒すはずの場でご自身が癒されていく事に気づき、その経験を財産と呼べるようになったとの事。紺屋の白袴、髪結いの乱れ髪とともに、医者の不養生ととかく世間に擲擻されがちな我々自身の健康ですが、会員の皆様も、お忙しい中十分にご自愛頂き、この長く暑い夏を乗り切っていけますよう祈念いたしまして、編集後記とさせていただきます。

広報委員 豊見山直樹